東郷村報
第144号
昭和38年9月1日
発行所
宮崎県東臼杵郡
東郷村役場

牧水祭記念号

在りし日の若山牧水先生

牧水祭にあたりて

牧水顕彰会長　黒木松美

九月十七日は牧水先生の第三十五周忌に当ります。本年も「牧水祭」をいたしまして遺業を讃えることにいたしました。

先生がわが文学史上に不滅の業績をのこされましたことは今更申すまでもないことでありますが、この偉大なる歌人を生みました東郷村として、はたまた東郷村民として、毎年のことながら九月十七日を迎えますに当り大きな感激とほこりと責務を痛感いたします。

昭和二十六年九月に発足しました牧水顕彰会の会則によりますと、その事業の主なものは㈠歌碑祭、㈡生家並に遺墨遺品等の保存、㈢印刷物の刊行とあげられていますが、㈠の歌碑祭と㈢の印刷物の刊行は細々ながら実行してまいりましたが、最も大事な生家並に、遺墨遺品の保存については何等の手もうっていない現状でありまして誠に慙愧にたえません。

もしこのまゝ拱手遷延いたしますならば、生家は勿論、遺品遺墨の保存は期し難く、悔を千載に残すことは火を見るより明らかな事でありますので、日夜心痛いたしています。

然してこの事業は本村に課せられた最高最美の文化事業であり、しかもその実現は坦々たるものではなく多くの困難性が伴いますので関係者各位をはじめ全村民の方々の文化遺産保存に対する熱意と深い理解をえて、物心両面の協力を得なければ到底実現は覚束ないと思っています。

本日牧水祭を挙行するに当り所信の一端を披瀝いたしまして、村民各位の御協力御支援を切にお願い申します。

× × × × ×

牧水祭行事

一、学童音楽会　九、〇〇～一〇、三〇
二、歌碑祭　一一、〇〇～一二、〇〇
三、記念講演　一三、〇〇～一四、三〇
四、祝賀会　一五、〇〇～一六、〇〇
五、学童作品展　九、〇〇～一六、〇〇

牧水先生の年譜

（年令は数え年）

明治十八年　一才
八月二十四日の朝、若山家に呱呱の声をあぐ、父の名は立蔵、母の名はマキ、繁と命名された。

明治二十二年　五才
医師であつた父が西郷村小川から招かれて一家共に移った。
「思い出の記」五本松峠を越えるときの猫物語から幼童牧水の性格がうかがえる

明治二十五年　八才
四月田代小学校に入学したが通学距離が遠いので義兄今西吉郎が校長をしていた羽坂小学校に転校し、山陰の叔父若山純曾方から通学、同年秋、一家と共に坪谷に帰り、坪谷小学校に転入した。

明治二十九年　十二才
三月、坪谷小学校卒業、延岡に出て、五月延岡高等小学校に入学、恒富に下宿

明治三十一年　十三才
母の旅行のお供をして金比羅詣りと大阪見物に行く

明治三十二年　十五才
この春、新設の延岡中学校に入学、同校寄宿舎明徳寮に入った。
時の山崎校長は文学的資質が豊かな人で、短歌をつくり西行を語った。牧水が短歌へ関心をむけたのは、この人の影響によるところが大きい。

明治三十四年　十七才
校友雑誌第一号に短文、短歌、俳句が掲載された。「中学文壇」に投稿、直ちに入賞して級友を驚かせた

明治三十五年　十八才
同級の友数人と回覧雑誌「曙」を発行、また短歌研究のため「野虹会」を起した。
「日州独立新聞」「中学文壇」「中学世界」「新声」「文庫」「国文学」等に散文、短歌、俳句を投稿した。

明治三十六年　十八才
秋に別府、大分、臼杵、佐伯地方に修学旅行、この頃から「牧水」の号を用いた。

明治三十七年　二十才
三月延岡中学校を卒業、四月早稲田大学文学科高等予科に入学、五月尾上柴舟を訪問、六月教室で北原白秋と親しくなり後下宿を共にした。

明治三十八年　二十一才
一月、尾上柴舟を中心に正富汪洋、前田夕暮等と金箭会を起し後、柴舟、夕暮汪洋、牧水の四人の車前草車となり、やがて三木露風有本芳水などが加った。土岐善磨と親しくなる。高等予科を終え帰省した。

明治三十九年　二十二才
北斗会を結んで小説の創作研究に努め。やがて回覧雑誌「北斗」を発行した。
自然主義の影響をうけて歌風が現実直写に変った。

明治四十年　二十三才
六月下旬、帰省の途につき岡山、広島、宮島から山口、耶馬溪をへて帰郷「幾山河」の歌を旅中に得た。
この頃から純文学者として身を立てる決意をした。

明治四十一年　二十四才
処女歌集「海の声」を発行、七月早稲田大学を卒業

明治四十二年　二十五才
一時中央新聞社の社会部記者となる。

明治四十三年　二十六才
第二歌集「独り歌へる」刊行、詩歌雑誌「創作」を編集発行、第三歌集「別離」を出版して一躍歌壇の花形となった。

明治四十四年　二十七才
太田水穂方で初めて太田喜志子に逢う。一時やまと新聞記者となる。

明治四十五年　二十八才
五月太田喜志子と結婚、喜志子は長野県広丘村の旧家に生れ、早くから詩歌に興味をもち「女子文壇」に詩を投稿してその花形となったこともある。七月下旬父危篤の報に接し帰郷、十一月父立蔵死去
就職して帰里とどまることをすすめられ苦悶、破調の歌多い

大正二年　二十九才
新年から九州各地にあそび、桜島、佐多岬をまわって帰郷、五月出郷、瀬戸内海の岩城島に滞留、尾の道京都を経て帰京、十月に伊豆方面に旅、長男旅人出生

大正三年　三十才
歌集「秋風の歌」を出版

大正四年　三十一才
歌集「砂丘」を出版、長女岬出生
妻、喜志子の病気療養のため三月中旬一家をあげて神奈川県下浦海岸に転居

大正五年　三十二才
散文集「旅とふるさと」歌集「朝の歌」を出版、三月東北地方へ旅、年末一家は東京に引あぐ

大正六年　三十三才
妻喜志子との合著歌集「白梅集」出版、八月に秋田から酒田、新潟をまわる十一月秩父の溪谷にあそぶ

大正七年　三十四才
歌集「溪谷集」「さびしき樹木」を出版、次女真木子出生、正月に伊豆、五月に関西から紀州の旅、十一月に利根川の水源から吾妻溪谷、六里ケ原とまわる。

大正八年　三十五才
散文集「比叡と熊野」出版、一月に犬吠岬、三月に信州、四月に妙義山麓の磯部、五月に榛名の山上湖、以後毎月のように関東各地にあそぶ。

大正九年　三十六才
二月に伊豆の各地、五月には群馬県川原湯温泉滞在草津から渋々峠を越えて信州に入り木曾、八月数年来の希望であった田園生活に入るため東京市巣鴨の家から静岡県沼津香貫に移る。

大正十年　三十七才
歌集「くろ土」を出版、次男富士人出生、散文集「静かなる旅をゆきつつ」を出版
三月に伊豆湯ケ島温泉、五月に関東各地、九月に上高地から飛騨にあそぶ。

大正十一年　三十八才
「短歌作法」を出版、新年に土肥温泉、三月に湯ケ島温泉、「山桜の歌」をえた。十月には岩村田の歌会に出席「みなかみ紀行」の旅

大正十二年　三十九才
「山桜の歌」を出版、一月に土肥温泉、七月に三河鳳来寺山、十月には甲州から信州に入って、松原湖、千曲川上流、秩父方面の旅

大正十三年　四十才
紀行文集「みなかみ紀行」を出版、正月は土肥温泉、三月は長崎、老母をともなって帰宅。老母は一か月ばかり滞在、そのあいだに伊豆の温泉につれてまわった。上香貫から千本浜に移る。

大正十四年　四十一才
この年は住居新築と新雑誌創刊の資金をうる目的の揮毫行脚にあけくれた。関西、信州、関東各地、九州と席の温まる暇もなかったその間に、新居が千本松原の近くに落成した。

大正十五年（昭和元年）　四十二才
五月、多年宿望の詩歌の綜合雑誌「詩歌時代」を創刊したが、資金難のため十月号限りで廃刊、その損失補足のために北海道方面に揮毫行脚をする。

昭和二年　四十三才
家族と共に静かな新年を迎えた。故郷での少年の日をなつかしみ「鮎つりの歌」をつくる。五月、朝鮮各地の揮毫行脚に出で七月末帰宅、健康すぐれず。

昭和三年　四十四才
年頭から健康は思わしくなかった。心の底から旅をおもい、快癒の日を待ったそれでも、五月の初めには伊豆の西海岸に遊び大瀬崎で釣をしたりした。九月初めから臥床、十七日朝七時五十分永眠、静かに四十四年の生涯をとじた。
病名は急性腸胃炎兼肝臓硬変症、法名は古松枕仙誉牧水居士

—友人鈴木財蔵あてのはがき—

▽わが居るは安房の海に突きいでし最端なれば、日は海より出で、海に落るなり、海の中に大島浮きて旦夕煙を吐く、その右に富士明らかに見ゆ海はわがために魂のふるさととなりみなもとなり

▽磯の日、ああ思い出おおき日ならずや、こころからの日を想うごとに、いずこともなく、ほのかに松の嵐、波のひびきのかようをおぼゆ、あ日向はあまりに静かなり、みどりなり、さは思ぼさずや、わずか小半日なりしかど、かの磯の日恋しく候。雨を見。谷をきいて、こころさらにあこがれ申し候

▽静かな夜、寂しい夜、そしてまた悲しい夜、恋しい夜、君にもまたこんな夜があることと信ずる、灯の影でいま自分は、泣きだしそうな面をして、何かを憶っている。

作品　おもいでの記

坪谷村

私の生れた村、くれしくいえば日向国宮崎県東臼杵郡東郷村大字坪谷は、山と山とのあいだにはさまれた細長い峡谷である。ことに南には付近第一の高山である尾鈴山が、けわしい断崖面をあらわしてまうえにそびえているので、いっそう峡谷らしい感じをあたえている。村の長さは東西にのびて四五里もあるだろうが戸数はわずかに二百か三百たらずのものであると思う私の家はその一番戸であった。つまり村の東の入口にあたつている。

ここにあらたに家を建てたことについても私は祖父を並ならぬ人の一つに思わざるをえぬのである。それはその場所が付近でも際立ってすぐれた好位置にあるからである。或はほかに理由があったか、もしくは偶然であったかも知れぬが、私にはやはりそれが彼に山川を見る眼があった故だとのみ思われてならない。家は村を貫通する唯一の道路にそい、真下に溪をのぞんでいる。

そしてちょどその溪は、そこまで長い滝のようになつて落ちてきた長い長い瀬が急にそこで屈折しているためにそこだけ豊かな淵となり、やがてまた瀬となって下り走り、斜め右と左とに末遠くその上下の溪を展望することができる地位にある。

溪は尾鈴山の裾にそうて白々と流れている。そして人家はたいていみなその溪にそうて作られてある。そこに五戸、ここに十戸と。そ長さ四、五里のあいだに三百たらずの家が散在しているといえばその寒村の面影はおのずから彷彿するであろう。住民の多くはみな山の仕事に従っている。材木と木炭と椎茸とが最も主要な産物となっている。大阪の街路に諸所日向炭と書いた看板を見ることを人は知っているであろう。そこでは泣く子をおどすに日向の炭焼にやってしまうといっているそうである。その木炭の本場として最もこの付近は聞えているのである。

晴れた日もわるくはないが、私の家の眺望は雨の日がとくにいい。それは雲と

山との配合が生きてくるからである。がんらい、この尾鈴山は、その南面の太平洋にのぞんだほうは、きわめてなだらかな傾斜で高まってきて、四千尺ちかい頂上となり、急に北に面して削りおとしたように岩骨をあらわしながら嶮しく切れているのである。

常に陰影の多いその山の北面には、晴れた日でもよく雲を宿しているが、一朝雨ふるとなると、山全体が、いやその峡谷全体が、真白な雲でとざされてしまう。あたかも霊魂をおびたかのように躍動して見えるのである。

私もものごころのつくころから、いたくこの溪と山の雨とを愛した。で歌の真似などはじめだして、雅号というものをつかうようになると、まず雨山と称したものであった。白雨ともいった。現につかっている牧水というのも、当時もっとも愛していたものの名ふたつをつなぎあわせたものである。牧はマキ、すなわち母の名である。水はこの溪や雨やからきたものである

牧　水　生　家

祖父のこと

私の祖父は、武蔵川越在の農家の生薬屋に奉公していた。そして当時、肥前の平戸にシイボルトというオランダの医者がきているということを聞き、生薬屋から自宅にかえり、さらに身延山詣でと称して自宅をいで、そのまま肥前まで行って、そこでシイボルトに仕えて多年のあいだ医学を学んだ。

当時蘭学または洋医学を修めたといえばかなり大したものであったに相違ないが、それがどうして日向のような田舎へひきこもったか不思議である。

彼は初め細島、美々津という海岸の港町に業をひらこうとし、さらにそれより山地に入りこんで、私の故郷である坪谷村にきたり、土地の旧家で、酒造家をしていた奈須家のむすめをめとり、そこに居を定めた。

彼はすこぶる殖産の道に長けていた。医業のほか、できるだけ広大に山林や田畑を買い、かつひらき、きて幾年もたたぬうちに、そこにおける有数の財産家になりおおせた。

そして一方では非常に文字を愛したらしい。幼いときの私のほこりの一つであったが、二階には十数個の大きな書籍箱がならび、それにはみな漢籍がみたされていた。蘭語の書籍もまじっていて、これなどは今でもとってあるかと思うが、その辞書などは厚さ二寸くらいの美濃紙の帖面にいっぱいに極めて細かく和筆で洋文字が筆写されている。これは彼の肥前時代の苦学のかたみなのである。

漢文はよほど好きであったと見えて、ちよっと他出するときでも必ず一二冊のそれをたずさえていたそうだ。そして晩年には、村の気のきいた青年たちをあつめて、みずからその講義をしていた。

彼の亡ったのは私の三才のときであったそうだ。私はその顔をおぼえていない。ただ長い雲白の豊かなひげだけを記憶している。私はよくそのひげにぶらさがりながら戯れたそうである。

その後、私は東京にくるようになって、何よりも先にその川越在の祖父の出た後というを尋ねていった。四顧茫々たる平野で、妙に遥かな思いがわいてならなかった。

私は常に思っている。人生は旅である。われらは忽然として無窮より生まれ、忽然として無窮のおくに往ってしまう。

その間の一歩一歩の歩みは、実に、その時のみの一歩一歩で一度往いては、ふたたびかえらない。

私は私の歌をもって、私の旅のその一歩一歩のひびきであると思いなしている。いいかえれば、私の歌はその時々の私の生命の砕片である

——独り歌へる——

父のこと

父は祖父ほどの人ではなかった。熊本や大阪で修業して、若くから医者となっていた。

その道の技能は村ばかりでなく、近郷の者を心服せしむるに充分であった。

一点の邪気をもたぬ情に厚い人であったが、惜しいかな意志がきわめて弱かった。そして常に何かを空想することを止めぬ小さな野心家であった。

そして医を業としていながら、多くは自宅におちつかす何か彼か、事業というようなことを空想してとび歩いていた。

しかし、私の物心のつく頃には、もう殆んど彼は一個の好好爺となり終っていたようである。またその頃には祖父の残した山も田畑もなくなっていた。

うまいのまずいのはいうものの、要するに、真実の歌のできる第一の要素はその作者がいとなむ生活にたいして、いかに熱心であるか、忠実であるかにかかっている。

自分の生命を追求する力が強ければ強いだけ、性質や器用、不器用の差によってあらわれる形や色彩には種々あろうが根本において動かすことのできぬ強みをその人の歌はもっている

——生命の欲求か——

牡丹桜

裏門のところに八重桜の木が三本たっていた。母の何才（十六才か十七か、とにかくきわめて若かった）かのとき、その父の任地（母の父は延岡藩の代官をつとめて当時私の村よりもっと奥の神門という村におもむいていたのだそうだ）から、どことかの神詣りに行く途中、脚胖の紐がとけて母だけ一人つれにおくれてこの八重桜の根がたで結びなおしていた。

それを、この裏門から見たのが、私の祖父と祖母で、それから母の身許をさがして、しゃにむに嫁に所望することになった。

ちょうど花の盛りで、紐を結びながらも思わずそれに見ほれていたという若かった母の面影が、この木の花を見るごとに私の想像にのぼったものであった。

私の地方には単弁の山桜は、私の家のこの三本だけで、ほかではほとんどどこでも見ることができなかった。おそらく祖父がどこかよそからもってきて植えたのだろうと思う

母のこと

私は五才くらいから歯を病んだ。右も左もむしばだらけで、痛みはじめると、はたしてどの歯が痛むのだかわからなくなり、まるで顔から頭ぜんたいが痛むかのように痛んできた。そんな場合、おいおい泣きわめいている私をだいて、いっしょに涙を流しているのは必ず母であった。私は母の涙をみると、いっそうに悲しくなり、なおさらに泣きあげたが、いつ知らずそれで痛みを忘れて、泣きつかれながら眠ることが多かった。

私の家から十丁ほど川上のほうに柿の木淵という深い淵があった。ここもなにやらの主がいるとよばれた大きな淵で、一方は高い岩の断崖となっており、その上の密林中に水神の社があった。母は私だけをひそかに起して背負いながら幾日とか日をさめて、そこへ丑の時詣りということをした。真夜中にこっそり家をでて、田圃路からやがて淵の頭の浅瀬をえらんで徒渡り、どうどうという水音をききながらその林の中へはいりこむときには、私はもう泣くにも声がでなかった。そうして小さな祠のまえではじめて火を点じて灯明をあげ、落葉のつもった土の上に私をもひざまづかせ、彼女もそうして共に歯の痛まぬようにと祈願をこめたのであった。

あるときはまた、ただしくしくと頬をおさえて泣いていると、母はしかけた仕事をすてておいて、私を背に負いながら釣竿をさげて溪へおりていった。そうして何か彼かたえず私に話しかけながら岩から岩をつたって小さな魚を釣ってくれた。いま思えばそのころの母は四十前後であったろうが、どうしたものか私には二十才前後の人と想像されてならない。母というより姉の気がした。更に親しいおんなの友達であったようにも思われてならないのである。

私はたえず山に入りこんで遊んでいた。このくせを私に植えたのは、まさしく私の母であった。彼女はじつにそうして山にはいって蕨を摘み筍をもぎ、栗をひろうことをよろこんだ。蕨汁や栗飯をたくという以外に摘むことが面白かったのである。さわり、さわりとかすかな音をたてながら、深い籔の中で前かがみになって筍をさがしていく彼女の姿を私はいまでも、ありありと眼のまえに描くことができる。

半日も山の中にいようというときなど、彼女は念入りに弁当をこさえて、そして小さなびんに酒をつめて籠の中に入れていった。そして私を相手に、見晴しのいい山の上や溪ばたで、弁当をつかうのを常とした。

峰々のとがりに、或る一つの力が動いているような感覚を覚ゆることが、おりおりある。峰から峰に語るのか、それらの峰が、ひとしく私に向っているのか、とにかく、それらの峰の一つ一つに、何か知らの力、言葉が動いているような感じをうけとったことがしばしばある

——自然の息　自然の声——

五本松峠

私の六才のときであったと思う。父は全家をあげて隣村の田代という所へ移って行った。移りきりに移るというのではなく、いわば出稼ぎのようなかたちであった。隣村といってもそのあいだに五本松峠という大きな山がよこたわっているので、それを越えて行かねばならなかった。その日、私は母と二人、五六人の見送りや出迎えの人たちといっしょにその峠を越ゆることになり、私だけは祖父の代から使ってきた古めかしい駕籠にのせられた。

ほとんどその峠の頂上に着こうというころであった私はふっと「こま」のことを考え出した。「こま」はうちに飼ってあった三毛猫で、私と大仲好しであった「こまをつれてきたか」ときくと、「いえ」という。さあ私のかんしゃく玉は破裂した。あらん限りの声をだして泣きわめいて、とうとう駕籠からころげだしてしまった。そして、そこの路傍にふんぞりかえって、どうしてもうごかない。どうでも「こま」をつれてこいというのだそうである手をつくしておどしつすかしつしてみたが、どうしてもきかない。とうとういっしょにいた一人がつれにゆくことになって、そのままわれわれだけ先にゆこうとすると、また泣きたて。「こま」をつれてくるまでどうしてもここで待っているというのだそうである。そこはもう私の家から二里ほどもはなれた山の中である。いくらいそいでも往復にはそうとうの時間がかかる。それに都合よく猫を捕えることができればよいがそれも怪しい。

途方にくれた母や一行の人たちはあきれ驚きながらさらに手強くおどしもし、すかしもしたが、耳にもいれない。まるで死ぬようにさわぎたてて果しがない。ついには母まで半ば泣きながら一行の人たちに詫びをいって、そこで猫のくるのを待つことになった。

何時間であったか、高い山の上でのつれづれな時間がすぎて、ようやく下の方から心細げに鳴く猫の鳴声がきこえてきた。いちはやくその声をききつけたとき私はいままで知らぬきまりのわるいような、悲しいような、いいようのない思いをしたのをおぼえている。

山が下り坂になったときこの強情な児をいじめてやれと思ったか、駕籠をかついでいた二人の若者は脚にまかせて走りだした。

駕籠の中には六才になった私と大きな猫のいれられた魚籠とが、ごろごろところげてあって、その痛さ苦しさといったらなかった。でも私は我慢に我慢を重ねて、ついに一声も泣かなかった。

わがこころ澄みゆく時に詠む歌か詠みゆくほどに澄めるこころか

歌に詠み入っている瞬間は、普通の信者たちが神仏の前に合掌礼拝している時と同じな、或はそれ以上であろうと思う法悦を感じているのである。おそらく私は、この歌の道の信仰として、一生進んでゆくであろうとおもう

（歌と宗教）

「ふるさと」の歌碑

遊戯

山村の少年にとって一年中の楽しみはお正月でありお盆であり、お祭であった正月には別に変ったことは無かった。唯だ百姓や杣人たちが業を休んで酒に酔っている位いのものであったが、お盆の印象は余程深いこれらの行事はすべて陰暦で行うのだが、そのお盆が来るとなると先づ出来るだけ奇麗にお墓の掃除をして十三日の来るのを待つ。そしてその日の夕方から三日間、お墓と各自の家の門口とに出来るだけ盛んに焚火をするのである。ただ地上に焚くばかりで満足せず、青竹の大きなのを用意して置いてその先に松明を結びつけ、そして中天に焔を上ぐるのを見て喜んだ。その火の高さ大きさが各戸の間に自然と競争となって、いやが上に長い竹大きな質のよい松明を選むことになっていたのである。村を囲んだ峰から峰へかけての空に白々と銀河が流れて、その下の溪ぞひにこのかがり火が炎々と燃え立っている光景は幼い瞳にどれだけ鮮かに映ったものか。やがて夜が更くるにつれて一つ二つとその火が消えて、アア何処のが消えた、誰れの所のも落ちたと数えながら次第に疎らになってゆく火光を見守っている身には何とも知れぬ哀愁のしみじみと浸み込むのを覚えたものである。十六日の朝には仏壇に供へて置いた供物をすべて青広い芭蕉の葉に包んで下の溪に持って行って流したそしてその供物に乗ってお精霊さまは今朝信濃の善光寺へお帰りになるのだという伝説をいかにも真実の様に信じ込んで、言い難い敬虔の念をもって淵に浮び瀬に隠るるその影を目送したのである。お盆が過ぐればもう秋になったと子供心にも深く感ぜられた。その頃盆とんぼと呼ぶ赤い小さいとんぼが一ぱいに空に群れているのが常であった。

鎮守の祭は霜月の末、もうかなり寒い頃であった。鎮守の社と順番に当った或る一部落とに祭礼所が設けられてその二ケ所で神事があった。祭礼は三日続くのだが、その第一の前夜をおよどと称へてその夜は夜通し賑った。そうした場所を廻って歩く見世物や行商人等がめいめい華かに店を張って、平常見たこともない玩具や菓子が並べられた。ことによく覚えているのはカルメラ焼で、その匂いと煙とは異常な好奇心と食慾とをそそったものである。もう夜もほのぼのと明けようという頃、なお夢中になって踊っている神楽の若者達が振り廻す白刃の光も神々しく眼に映った。昼はまた神楽のほかに四太鼓という舞踊が演ぜられた。これは太古に於ける神様たちの凱旋の踊りだという事で、村の若者達各自山で猟って来た鹿の角や山鳥雉子などの奇麗な羽根で身を裳い一人音頭取の唄や音頭につれて大きな丸い環を作り乍らめいめい前に結びつけた太鼓を叩いて踊り出すのである。

いま一つ、鎮守の祭のほかにひきの神さまの祭というのがあった。ひきは比企と書いたかとも思うがよく覚えぬ、ずっと離れた二十里ほども遠い児湯郡のひきという所から出て各所を経廻りながらその途中私の村をも過ぐるので、その折に祭礼が行われる。なんでもこの神様は女神でその巡って歩くさきざきは戦い負けて逃げ廻ったあとであるのだ相だ。私の村付近では先づおろしごという部落で一夜礼がある。そこはその女神が子使をおろした所だそうだ。その次がうぶのというのがある。ここでそのおろした子の生毛を剃った跡だそうで、その次がこあらい、ここで初めてその子を洗はれたのだそうである。どこでもただ一夜づつの、いかにも敗戦の女将が嬰児を抱えて逃げて歩く様なあわただし祭礼だが、矢張り相当に賑った。この祭には百姓たちはみな各自の田畑に出来た作物を供えて、その出来栄を競う様な風がある。師走も既におし迫った頃の、随分寒い祭りであるがおろしごうぶの、と私たちは附近で催されるその祭のあとを追う事を怠らなかった。